

「相応しい言葉、それはマイノリティよりもバイタリティ」

授業日：2023年10月11日

講師：広瀬 浩二郎 先生

学部：医療福祉経営 医療通訳 専攻

氏名：マシート 尚子

職業：会社員（特許事務所事務職）

この度のご講義では、非常に内容の濃い話を伺うことが出来ました。ありがとうございました。大変貴重な内容を面白おかしくお話し頂き、とても楽しい講義で、時間があっという間に過ぎた気がいたしました。

広瀬先生のお話を伺ったとき、その発想のユニークさに心を奪われました。「この子らを世の光に」という糸賀一雄さんの言葉を一步前進させて、「この子らから世の光に」と表現を変え、いかに非当事者を巻き込んでいくのかという発想に、感服致しました。

今回の講義にて、「ユニバーサル・ミュージアム」について初めて知りました。「触覚鑑賞」というのは、視覚にて美術作品を鑑賞できない人たちのためだけではなく、美術作品の鑑賞の方法を変える、広い意味で言えば、新しい世界を味わうことができる鑑賞方法だと思います。

このようなユニークな発想がなぜ可能なのか、通常の発想を転換するという考えの源となったきっかけをご質問させて頂きましたが、お話の中で広瀬先生の人生のご苦勞が垣間見られました。人生の転機という折々に相当なご苦勞があったことは容易に想像できますが、それらの苦勞を面白おかしいお話に変えてしまう発想にも敬服いたしました。

講義の中で、広瀬先生がお使いの「触って時間を知る腕時計」や「点字を書くためのタイプライター」を見せて頂きましたが、どれも初めて見るものばかりでした。タイプライターは生産数が少ないため高額になるというご説明を受け、確かにそのような意味において、広瀬先生はマイノリティに該当されるのだと思います。ただ、私には、広瀬先生はマイノリティよりもバイタリティの方が相応しい言葉のように思えました。

広瀬先生と相良啓子先生の著書「よく見る人とよく聴く人ー共生のためのコミュニケーション手法」(岩波新書)は、医療通訳者を目指す自分にとってコミュニケーションの根本を学ぶことができる1冊のように思います。「障害者」とひとくくりになされてしまいがちですが、お二人が正反対の世界に住んでいるという話を伺ったとき、サン・デグジュペリ(1900~1944)の「星の王子さま」の名文をふと思い出しました。「ものごとは心でしか見

ることができない。大切なことは目には見えない。(訳：内藤濯)」私たちは、本当に大切なものを見るとき、それは目からでも耳からでもなく、心で感じるものなのかもしれないと思います。そしてそれはどの世界に生きる人にも共通するもので、「触覚鑑賞」にも通じるものであると思いました。

最後になりますが、今回の広瀬先生の講義は「参加型講義」のように思いました。先生が話をされ、受講者が笑ったり、声を上げたりすることに先生が反応され、応えられたり、言葉を繰り返されたりすることで、講師と受講生が一体化しているような講義のように思えたのです。授業の最後には、「さわる＝目に見えない世界を探る」ため「入る」「流れる」「求める」の3つの動きを全員で行い、一体化完成という感覚でした。

会社員の一人として、水曜日の夜に教室の講義に参加することの難しさを感じながらも、今回は参加して、そして一体感を味わうことができ、本当に良かったと思いました。

「ユニバーサル・ミュージアム」での「さわる鑑賞プログラム」、今後とも応援しております。本当にありがとうございました。